ものがたりの舞台

和歌山北部

文学作品の一部を抜粋して掲載

❶滝口入道

高山　樗牛（ちょぎゅう）

壽永三年三月の末、夕暮近き頃、**紀州高野山を上り行く**二人の旅人ありけり。浮世を忍ぶ旅路なればにや、一人は深編笠に面を隠して、顔容知るに由なければも、其の装束は世の常ならず…

❷紀ノ川

有吉佐和子

「そうでございますのし」

豊乃は静かに合掌して目を閉じた。花も倣って手を合わせたが、廟の前の**柱にぶら下っている数々の乳房形に**気がつくと、しばらく瞑目することを忘れていた。それは羽二重で丸く綿をくるみ、中央を乳首のように絞りあげたもので…

❸華岡青洲の妻

有吉佐和子

温暖の紀州は殊に平野から紀ノ川沿いに北上する一帯の村邑を穏やかに豊かなものとしていたから、徳川治政の平和な時代に、**草深い名手荘では**、村人たちの間で長く話題になるような事件は滅多に起らなかった。

❹17歳のうた

坂井希久子

このあたりは**紀ノ川沿いの平野部だけど**、自転車でちょっと北上すれば大阪府との境目の和泉山脈にぶつかる。熊の目撃情報は今のところないとはいえ、サメの心配をするよりはよっぽど現実的だ。

❺前科持ち

津本　陽

現場に到着したときは、午前一時を過ぎていた。近鉄デパートは、国鉄和歌山駅前ターミナルの北側にある。**大通りを挟んで南側に向いあう農協会館との間をつなぐ、約八十メートルの横断歩道**のなかほどに、男は倒れていた。

❻行人（こうじん）

夏目　漱石

自分たちは何だか市の外廓らしい淋しい土塀つづきの狭い町を曲って、二、三度停留所を通り越した後、**高い石垣の下にある濠を見た**。濠の中には蓮が一面に青い葉を浮べていた。その青い葉の中に、点々と咲く紅の花が、落ち付かない自分たちの眼をちらちらさせた。

「へぇーこれが昔のお城かね」と母は感心していた。

❼籠（かご）の鸚鵡（おうむ）

辻原　登

下津は、紀伊國屋文左衛門が紀州ミカンを積んで江戸に向けて出帆した港として知られる。町の主要産業はかつてミカンと漁業だった。紀伊國屋文左衛門の船出からおよそ二百七十年後の一九五〇年代のはじめ、丸善石油が紀伊水道に面した天然の良港に目を付けて、ここに大規模な石油精基地を建設した。

❽Dの複合

松本　清張

網野神社から紀州の加太へ回ってもらいたいが、ここは、これまでも日本古代史の上ではたびたび注目された土地である。また、ご承知のとおり、この近くには淡島神社がある。

❷慈尊院の乳型

❶高野山

❹紀ノ川沿いの平野

❸旧名手宿

❻和歌山城と濠

❺JR和歌山駅付近

❽加太の海

❼下津の港